

## コールとキャツキルの自然

高橋 順子

1825年風景画家としてスタートして以来、コールはハドソン川をさかのぼって、キャツキルやアデロンダックにしばしばスケッチ旅行をし、時にはひと夏を過ごすこともあった。1836年、マリア・バートウ (Maria Bartow) と結婚したコールは、キャツキルに居を移し、生涯そこに住んだ。彼はその辺りの自然の姿をロマン化した手法で表現した。人の手の入っていない森や山、雲のさま、息をのむような絶景の崇高さと、牧歌的田園風景、紅葉した木々、静寂な空の美しさを常に念頭において制作した。彼がロマン派的手法で描いたのは、彼自身がアメリカの自然の荘厳さを強調したかったからであり、彼の作品はアメリカ国民に自国の自然の壮大さと美しさを自覚させる効果があった。彼は、自分の作品の中でたとえ何らかの脚色がなされたとしても、そのひとつひとつは実在したものをスケッチしたのであるから、その配置のしかたを少し変えても、自然そのものを偽って描いたことにはならない、と書いている。

よく歩いた作家として知られる、ソローやエマソンやクーパーと同様、コールもよく歩いた画家であった。歩くということはもっとも自然に近づける方法であった。自分の行きたいところへ自由に行ける。ターンパイクを歩くより、鉄道を使うより、はるかに自然と一体になることができる。先を急ぐ旅人ではないので、その距離をこなす義務や時間にしばられることなく、自分が関心をもつ対象を心ゆくまで観察しながら歩き続ける。天候が急変しても、日が暮れてしまっても、歩く人はどう対処すべきかを心得ている。どこへ行っても、そこは自分の庭の続きであるからだ。

コールは歩くことがもっとも好きで、画題はすべて歩くことで見出した。馬に乗って、馬の行く速さとその高さから見たものでもなく、鉄道に乗って、その走る速度とその窓から見たものでもなく、常に自分の足で歩いてゆきながら、自分の歩く速度と自分の目の高さから見た風景を描き続けた。歩くおかげで彼は馬に乗っては行けないところへ、馬に乗る人が見ることのできないところへ行くことができた。彼は樵や交易者や調査のために行く人たちが通るような山道や沢道を選んだ。スケッチブックのほか絵具、絵筆、腰掛けてスケッチする場合のためのキャンプ・スツール、暑い日の日除けの傘、そして時にはステッキをもって出掛けた。コールの描いたものはコール自身が見たもの、考えたもの、感じたもの以外の何ものでもなかった。

1835年8月18日のコールの日記。

「すばらしい日だった。山の空気は涼しくて、クリスタルのように澄んでいた。仕事の後、キャツキルの谷間を歩いた。もう陽は落ちていたが、森も野原も山々も、いままで見たことがないほど美しかった。」

同年10月30日。

「あたり一面にとっても澄んだクリスタルのような雰囲気漂っている。葉がすっかり落ちた茶色の木々は澄み切った紺碧の空に染まってゆきそうだった。空は晴れ上がって、雲ひとつなく、空気はとても静寂で、しかも新鮮であった。」

歩いているうちに雨や嵐に遇えば、廂のように突き出した岩の下で雨宿りすることもあった。そのあいだにも目撃することは多かった。滝のように岩肌を流れ落ちてゆく雨、そのしぶき、霞む山の稜線、大きく揺れる木々、やがて通り過ぎて行く嵐、そのあとに出現する虹、そして再び青空、

鳥のさえずり、新しい風……。キャツキルの山中で道に迷い何時間も歩き続けることもあったが、コールにとってそれはたいした苦行ではなかった。1833年にパトロンのルーマン・リード (Luman Reed) に宛てた手紙にコールは次のように書いている。

「自然の光景はどんどん変化してゆきます。一日のそれぞれの時刻にも、一年のそれぞれの季節にも、陽光の中で、そして嵐の時などにも……」

人間社会からすっかり離れて、大自然の中にすっぽり包まれてしまった存在、野生の動物や鳥や木や草や花と同等の存在となれたような気がしていたにちがいない。人の肖像にではなく、人の生活の様にではなく、自然の織り成す様に、その中にいる自分の感動を表現するためにコールは風景画を描いた。

コールがアメリカの画壇に鮮烈なデビューをすることができたのは、彼が風景画を選んだからだという見方がある。当時はまだ肖像画が絵画の主流であった。コールは、画家になる以前、家族や知人たちの肖像画をよく描いていたが、風景画を描くことをもっとも好んでいた。そして風景画は新しいジャンルで、彼は幸運にもこの世界で力を発揮し、成功した。彼が、アメリカの風景を描くことになった動機はおそらく、彼が“外国人”であったからであろう。イギリスを離れたのは17才であったから、彼はイギリスの自然についてはよく知っていたであろうし、その他のヨーロッパ地域の自然に関しても、絵画、書物、体験談などをとおして多くの知識をもっていたであろう。そしてコールはアメリカに来て、アメリカの自然とヨーロッパの自然を比較することができた。それは旅行者としてではなく、ヨーロッパ (旧世界) を捨てて、アメリカ (新世界) に移住してきた人間としてであった。

彼にとって、ほとんど人の手が入っていないアメリカの自然は雄大で美

しいだけでなく、神秘的で、何よりも新鮮に映ったにちがいない。コールの記述の中に次のような箇所がある。

「岩陰に身を寄せていると、いろいろな想像がめぐってくる。あたかも自分がチャリオットに乗って、重力を超えて舞い上がってゆくような気がしてくる。霧のうねりの中に、山より高く昇り、今度はまったく何があるかわからない雲の中へ落ちて行く。」

これは、自然の中で自分が魂のようになって、自由に浮遊し、しまいには自然と一体化できるのではないか、そして大自然の神髄に近づくことができるのではないかという願望を表している。想像をめぐらし続けるコールは、しだいに現実の世界から遊離してゆく。

その状態は、彼がどこか別の世界へ行ってしまうということなのか。または彼自身が何かほかの存在に変貌してしまうということなのか。1835年の夏、コールはキャツキル山地のリップ・ヴァン・ウインクルの洞穴の近くで、ある体験をした。コールは夜じゅう歩きまわって、喉が渇いてやっと小さな流れを見付けた。

「そこには小さなブリキの器があった。旅人のために置いてあるらしい。あんな夜更けに誰かが来るかもしれないと、器を置いておくのはおそらく妖精のような、とても心やさしい人にちがいない。」

“心やさしい人”，すなわち“妖精”と連想するところにコールのロマン主義的思考がうかがわれる。

新生国家アメリカが大発展を続けるなかでコールは、時代に逆らう生き

方をしたことになる。コールは自然を愛するあまり、発展により自然が破壊され、失われてゆくのを見るに耐えられなかった。彼は国の発展と自然美の消失という矛盾に悩み続けた。コールはまた、ある意味ではプロフェッショナルな画家にはならなかった。アメリカにおける最初の本格的風景画家としての地位を築いたコールは、パトロンからの依頼を引き受けることはしたが、そして実際に多くの作品を彼らのために制作したが、売れそうな絵、受けそうな絵、すなわち、当時の人々が競って買い求めようとしたような絵をつぎつぎに描いて、名声のみでなく、富みをも築き上げてゆくというのは彼のスタイルではなかった。自分の両親、姉妹、および妻の家族を含め、大家族を養う義務を負っていたコールは、常に経済的に追われる生活であったが、自分の作品のテーマは、たとえパトロンからの依頼の仕事であっても、依頼主に迎合するものではなく、自分の信念と理想を着実に盛り込んだものであった。彼はよく、自分のパトロンたちに手紙を書いたが、それは、自分が本当は何を描きたいかを理解してもらうためであったと考えられる。コールの目はいつも、人と物とで日増しにふくらんでゆく社会ではなく、人間の行為を黙って受け入れ、泰然として変わることのない自然の荘厳さに向けられていた。

山歩きが好きで、都会嫌いのコールであったが、1827年に「ニューヨーク・スケッチ・クラブ」が創設され、新進の風景画家として評価されていたため、創設者のひとりに名を連ねることになった。このクラブには、“ニッカー・ボッカー・ライターズ”として知られる作家たち、「レザー・ストックキング物語」のジェイムス・F.クーパー、「スリーピー・ホローの伝説」のワシントン・アービング、詩人であり、イブニング・ポスト紙の主筆であったウィリアム・C.ブライアントなどがおり、その他、アマチュア作家、パトロン、政治家なども会員となった。当時のニューヨークは、ボストンとともに、画家、作家、企業家などが集いあう文化的中心地で、

画家と作家たちはとくに交流があった。先に上げた作家たちは、アッシャ・デュラン (Asher B. Durand), ジョン・ケンセット (John F. Kensett), マーチン・ヒード (Martin J. Heade) などの、ハドソン・リバー派の画家たちと親交があり、ロマン主義的考え方や発想とアメリカの自然風景に関して共通した関心をもっていた。その中でも、ブライアントとコールの友情の深さはとくによく知られている。年長で、“アメリカ人”としても先輩であったブライアントは、コールに多くの助言をし、アメリカの自然を描くことに専念するようコールを励ました。コールが最初のヨーロッパ旅行に発つ際に贈った詩、「ヨーロッパへ発つ画家コールへ」の中でブライアントは、どこへ行っても、すでに道があり、人家があり、墓があり、遺蹟があり、人の足跡が見られるヨーロッパに比べ、人影もない湖、バッファローが往く大草原、大鷲が舞う果てしない大空など豊かな自然に恵まれたアメリカを忘れないようにと説いている。

1829年6月にロンドンへ旅立つまえにコールは、ナイアガラの滝を見に行っている。

「私はナイアガラを見ずにヨーロッパへ発つ気にはなれなかった。わが国の未開の風景を見ておきたかった。そして、その姿を自分の心にしっかりと焼き付けて、他の国々のすばらしい景色を見ても、このナイアガラの壮大で神秘的な美しさを決して忘れることのないようにしておきたかった。」

コールはナイアガラで数枚のスケッチを描き、それをヨーロッパへもっていった。

コールはのちに、自身のヨーロッパ体験をふりかえり、ある手紙の中で次のように書いている。

「スイスの景色のすばらしさに、アメリカのことを忘れてしまうだろうと思われるかもしれないが、そういうことはない。われわれの国の風

景には独特の魅力があり、その力強さは決して衰えることはないのだから……」

1836年に制作されたコールの「帝国の興亡」は、「黎明期」、「牧歌期」、「達成期」、「滅亡期」、「荒涼」という五連の作品である。この中でコールは、文明の興亡の歴史的サイクルをもとにして、国というものが辿る運命のひとつの可能性を描写している。古代ヨーロッパ文明がモデルになっているが、実際コールは、ニューヨークのようなアメリカの大都市の過去と現在と未来を連想して寓意的に表現しているとされる。この作品には、ニューヨークのみならず、発展し続けるアメリカとその文明に対する警告が含まれている。

国土が広く、人口が増大し、機械化が進めば、開発はいやおうなく進行し続け、自然の様は大きく変化する。それまでの平穏な環境はどんどん侵攻され、消滅してゆく。その道筋はよく分かっているけれど、目のあたりにその変化を見せ付けられながら生活し続けることは失望をとまなうものであった。

理解している部分と、現実と理想の部分が一貫せず、軋みあってコールを苦しめた。アメリカがこのままいったら、その将来はふたつのうちのどちらかである。人間社会の偉大なる文明国となるか、または自滅するかである。したがってこの絵の“帝国”は、“アメリカ帝国”を念頭において制作された可能性がうかがえる。

1820年代半ばから1840年代後半まで、コールがハドソン渓谷やアデロンダックの山々を歩きまわって見たものは、大自然のあいだを縫って開発の名のもとに、徐々に破壊されてゆく自然の姿であった。空高く聳えたっていた大樹はつぎつぎと倒され、運河や鉄道を建設するために消滅してしまった原野や森林があり、急増する移民を受け入れるために、町や村も将来の構想や計画なしに拡大されていった。

「オオカミの吠える声が支配していた地域に今では、人間の振るう鋤が日の光にきらきら光っている。」とコールは1841年のエッセイに書いている。

19世紀の第二クオーターにおいて、ニューヨーク州の人口は、1820年の1,372,812から、1850年の3,097,394へ倍増した。

これは1825年以降、移民の波が押し寄せたことによる。ほとんどイギリスとアイルランドからで、ニューヨーク港からニューヨーク州各地へ、またはカナダのケベック港からシャンプレイン運河を通過して北からニューヨーク州へ入ってきた。これで、ニューヨーク市や州都オーバニーなどの人口は急激に増えた。また、アメリカ北東部において1830年代は鉄道ラッシュで、1831年にモホーク・ハドソン鉄道がスケネクタデーとオーバニー間16マイルを開通させたのについて、1836年までには、サウス・カロライナ、ペンシルバニア、マサチューセッツ、オハイオなど11州にわたって1000マイルを超える鉄道網が完成された。鉄道は、そのスピードと年間を通して操業可能なことと、水路のない場所にも行けることなどにより、運河に勝る有益性を発揮し、またたくまに“iron horse”はアメリカ全土に発展していった。ニューヨークからシカゴへ運河を通過して行くと14日かかったのが、鉄道だと6日で行けるようになった。

しかし、初期の鉄道は揺れと騒音がひどく、また、薪をたいて燃料としたので、窓を開けておくと、その燃えかすが飛んできて、乗客の衣類を焦がすことがあり、ひどいときには衣服が燃え上がって火傷する場合もあった。

1840年に全国の鉄道の長さは2818マイルだったが、10年もたたぬうちに9021マイルにまで延びた。主に東部と西部を結ぶものであったが、特にニューヨーク州を横断してゆくものが多かった。そのいくつかはキャツキルを通り抜けて、ニューヨーク州北西部へ延びていった。キャツキル・ク



リーク沿いにも、キャツキルーカナジョリー鉄道が建設された。このあたりは、コールの気に入りの散策地域であった。

1836年8月、コールは日記に次のように記している。

「昨夜散策に出掛けた。キャツキル溪谷の上の方へ行った。そこは鉄道建設が行なわれているところだった。そのあたりは私の大好きな散策の場所だったのだが、今はもうその静寂さは完全に失われている。しかし自然の姿はなお美しさを保っている。人間が岩の山を崩したり、その岩のあいだにしっかりと根を張っている木々を倒さないかぎり、そしてそのあいだを流れる小さな川が、その流れを変えさせられることがないかぎり……」

「キャツキルの川」(1843年作)というコールの作品には、鉄道が走るキャツキルの田園風景が描かれている。川で釣りをする人、畑で働く人、民家のあいだを縫って、長く煙を吐きながら通ってゆく鉄道、その彼方にはキャツキルの山々が霞んでいる。コールは、鉄道は自分たちの庭に巨大な機械が侵入してくるようなものだと言って敬遠した。

新大陸アメリカにヨーロッパから移ってきた人々は、すでに十分に近代化された知識と技術と機械力をもってやって来たので、この国の開発は他に類をみないほどのスピードと勢いで進んでいった。その中で、アメリカの独立から半世紀もたたない時期にすでにこの国の将来を危惧していた者がいたことは興味深い。イギリスに生まれ、アメリカに移住してからも、二度もヨーロッパへ長期旅行をしたコールが旧世界で目撃したものは、人口過剰で開発しつくされた国土と、過去の文明の遺蹟群であった。アメリカの急速な発展度がコールに、いつかアメリカにもヨーロッパで見たものと同じ光景が広がってゆくことになるのではないかという杞憂の念を抱か

せたとしても不思議ではない。

アメリカは広大な大陸ではあるが、コールは将来、その大自然が徐々に、人々が気づかないうちに失われてゆくことを予知し、それを非常に残念に思い、その思い故に多くの風景画を描き遺した。アメリカの自然の雄大さ、荘厳さを表して、人間社会が何を失おうとしているのかを訴えるとともに、現実として、これから後にも、かつてはどうであったかを人々に記憶してもらいたい、そして彼らが何を失ったかを認識してもらいたいという思いがあったからであろう。そして、彼自身も、彼の家族も含めて、ヨーロッパからやってきて、アメリカ大陸を開拓していった白人移住者のひとりであったことも、紛れのない事実であった。故にコールは開発による自然破壊と、自然に対する憧憬の念とのあいだで、その矛盾に悩み続けたひとりであった。

「晴れた朝のハドソン川」(1827年)はコールの初期の代表作品のひとつであるが、この作品を描くことになった時のことをコールは次のように記している。

「霧は、吹き流される雪のようにハドソン川をベールのようにおおっていた。東側の遠い山々は見えず、別の世界のようにであった。陽光は真珠色の縞模様となり、上空では雲がうすくかかっていた。これから晴れてゆく空の色はうすいグレーであった。山の下の方にある霧は上がりかけていた。丘の頂の木々は霧にその影を映していた。はるかかなたの地平線に沿う一条の光はたいへん美しかった。しだいに晴れてゆく霧をとおして、美しく、鮮やかな野原の緑が見えてきた。山はまだ暗い部分にもきらきらするものが現われてくるが、しだいにその姿を現してくるハドソン川は、まだ深い眠りについていた。」

19世紀アメリカに生きたコールは、急速に変貌してゆくアメリカ社会のなかで自らを大自然のなかへ導いてゆく精神的世界を構築することに、おいなる努力をし続けたひとりの男であったといえる。

#### 参考文献

Adams, A.G., *The Hudson Through the Years*, Fordham University Press, New York, 1991.

McCoubrey, J.W., *American Art 1700-1960*, Prentice-Hall, New Jersey, 1965.

Mulligan, T., *The Hudson River Valley*, Random House, New York, 1991.

Powell, E.A., *Thomas Cole*, H.N. Abrams, New York, 1990.

Stilgoe, J.R., *Thomas Cole: Drawn to Nature*, Albany Institute of History & Art, Albany, 1993.

Truettner, W.H., and Wallach, A., ed. *Thomas Cole, Landscape into History*, Yale University Press, New Haven, 1994.